

特集 ● 象徴天皇制の現在を問う

1989

# 昭和天皇の御即位

# 御即位

新書 1000  
新書 1000

定価1,236円(本体1,200円・税36円)  
ISBN4-7866-1030-5 C1010 P1236E

# 季刊 思想と現代

1989年 9月  
第19号

唯物論研究協会編集

発売元 白石書店

## 目次

### 特集 象徴天皇制の現在を問う

〈座談会〉

生活史のなかの天皇制と思想の課題

網野善彦 / 古田 光 / 司会・河野勝彦

象徴天皇制の思想的意義

古田 光 20

世界システムのなかの象徴天皇制

加藤 哲郎 35

天皇制批判の主体形成と民主主義

吉崎 梓司 49

象徴天皇制と女性——私観・天皇制——

鈴木 かつ子 64

天皇観の思想構造

田平 暢志 78

\*象徴天皇制とわたし\*

田中 一 92

天皇制に関連して

許 萬元 95

朝鮮人にとつての天皇制

大丸 義一 98

天皇制研究と私

細野 武男 101

象徴と統合への疑念

鈴木 正 104

象徴の含意

野口 宏 108

〈シリーズ〉 現代科学から人間像

野口 宏 108

コンピュータ科学における人間観

太田 直道 119

〈文化時評〉

山の断想

〈書評〉

竹村英輔著『現代史におけるグラムシ』

成定・佐野 塚原編著『制度としての科学』

芝田進午著『人生と思想』

竹内芳郎著『ポストニモタシと天皇教の現在』

竹中恵美子著『戦後女子労働史論』

〈前号批評〉

「西欧マルクス主義」の紹介と検討

唯物論研究協会(全国唯研)第12回(1989年度)総会・研究大会のお知らせ

「質問と対話のコーナー」設定のお知らせ

編集後記 編者 荒川泰彦

# 現代史における

1本収録 ● 著 ¥2390(税込)

グラムシが今日の哲学・思想状況に  
問いかけるものは?  
「マルクス文献精読」の意義と位置づけ、「時  
代認識」の再考をはじめ、グラムシの思想的管  
為(実践)を、歴史の文脈にすえて考究し、「獄中  
ノート」の全体構造を分析した画期的到達点ノ  
芝田進午 ● 著 ¥1700(税別)

# 人生と思想

山田 洗 ● 著 ¥2200(税別)

敗戦から一九八〇年代までの現代日本思想通史

青木書店 東京都千代田区神田神保町1-60  
電話 03-2921-0481 1000

# 古代から現代まで50問50答

歴史教育者協議会編 46判・2575円  
にいたるそれぞれの時代に天皇はいかなる存在であり、天  
皇制はどんな特徴をもっていたのか。50のテーマにわけて  
第一級の歴史研究者、教育者がわかりやすく解説する。

# 東京裁判論

新発見資料で日本の時部を照らす 46判・2500円

# 日の丸:君が代問題とは何か

山住正己著 この旗と歌の歴史的役割 46判・1330円

# 「御真影」に殉じた教師たち

岩本務著 「教育実践」真相をさぐる 46判・2200円

# 象徴天皇制とは何か

日本現代史研究会編 天皇制の本質 46判・927円

# 天皇制と新「超国家主義」

神利夫著 天皇制とオロギと批判 46判・1854円

大月書店 東京都文京区本郷9-11-9  
電話 03-5657-1111  
FAX 03-5657-1111

定価は税込

装幀 フレックシユ・アップ・スタジオ 荒川泰彦

一はじめに——八年研究総会に欠けていた論点——

昨八年秋の唯物論研究協会研究総会のシンポジウム・チ  
 ーは、「天皇制イデオロギイを問う」であった。報告が面  
 白そうだし、会場も勤務先の近くであったので、数年ぶりで  
 私も出席した。「自廣ムード」のさなかで討論も活発だった  
 が、なかでも興味深かったのは、渡辺治氏の報告「現代天皇  
 制の展開とその矛盾」とそれをめぐる討論であった。

渡辺氏のその時の報告内容は、その後の経過をふまえて同

# 世界システムのなかの象徴天皇制

加藤哲郎

氏「現代政治構造の中の天皇制」(歴史学研究)五九二号、八  
 九年四月、「現代天皇制のゆくえ」(教育)八九年四月、「中  
 貴根康弘と天皇制」(法律時報)八九年五月)などに活字化  
 されているが、当日のシンポジウムの大きな論点になったも  
 のに、同氏の「六〇〇万人の記憶をどう見るか」という問題  
 提起があった。渡辺氏はそこで、「六〇〇万人」という数字は、  
 現代日本に特有の保守支配の構造——それは六〇年代に形成  
 されオйлシヨック以降確立をみたものであるが——が依然  
 強力であることをみせつけたものと思われる。六〇〇万人の  
 中には、確かに天皇制の統合やら集団主義的特質で説明でき

私たちは、あらためて、日本国民なるもの内裏が、多く  
 の民族、多くの文化を含んでいることを前提にして、「国民  
 統合の象徴」というこの意味を考えなおしてみなくてはな  
 らない。いかえれば、多民族、「雑種文化」ということを  
 新たな前提として、国家や国民のあり方を考えなおしてみな  
 くてはならない。そこで大切なことは、まず内なる少数民族  
 の自由や人権を尊重し、抑圧から解放すること、その文化へ  
 の理解を深めることである。それは、彼らのためだけにでは  
 なく、私たち大和民族が、これから世界のなかで他の多くの  
 民族と共存し、共生してゆくために必要なのである。そうい  
 う民主主義を強化していくことが、これまでの天皇制国家主  
 義の基礎をつきくずし、それを新たなナショナルリズムに変容  
 させてゆくであろう。

(ふるとひかる 横浜国立大学・哲学)

対話とコミュニケーションの現状を総展望する！

## 対話の哲学

議論・レトリック・弁証法

島崎隆著

A5判上製304頁  
定価3000円(税別)

本書の主な内容

1 対話・レトリックをめぐる現状  
 「なぜ、いま対話とレトリック」  
 クなのか) II 民主主義の  
 基礎としての対話「対  
 話の本質と歴史」III  
 対話・レトリック  
 哲学からの批判  
 (「知の流動化へ  
 向けて」IV 真理  
 反映説か 真理合  
 意説か「対話の  
 客観性をめぐつ  
 て」V 二つの弁  
 証法の統合「弁  
 証法的方法の再  
 構築へ向けて」VI  
 P・ロレンツェン  
 の「対話論理学」(西  
 洋合理主義の極致) VII  
 ナスとしてのレトリック「新  
 しい知の地平へ」VIII 対話と「超対  
 話」(西洋と東洋の交差)

みずち書房 東京都文京区本郷2-4-11 近藤ビル TEL 03(813)7068

## 二 世界最大の君主制国家日本

レーニン『帝國主義論』の「資本主義列強による地球の領土的分割の完了」とは段階を異にして、「諸民族による地球の国民国家的分割の完了」にいたった二〇世紀末において、日本は、世界最大の世襲君主をもつ国家である。『朝日年鑑』一九八九年版「各国要覧」によると、いま、世界で君主（王政、首長制などを含む）をもつ独立国家は、アジアでは日本（人口一億二八七方）のほかに、タイ（人口五三六〇方、立憲王制）、マレーシア（一六五方、但し國王は九つの州のサルタンとの互選で任期五年）、ブルネイ（二三方、世襲制サルタン）、ネパール（二七九方、立憲君主制）、アータン（二四二方、王政）、ヨルダン（三七九方、王政）、サウジアラビア（二六二方、王政）クウェート（八七方、首長制）、オマーン（二三方、首長制）、アラブ首長国連邦（二四五方、七土儀國により大統領をおく）、カタール（三三方、首長制）、バレーン（四三方、首長制）、アフリカでモロッコ（二三三方、立憲君主制）、レソト（二六二方、立憲君主制）、

る部分も少なくないものと思われる。しかし、その多くは、企業支配と保守政治の論理によって動員されたものであり、必ずしも天皇制への忠誠によるものとはいえない。実はこの保守支配と天皇制のギャップにこそ現在の天皇制、否、政治支配自体の大きな問題が伏在していると考えられる」と述べた（前掲『歴史学研究』論文、二〇頁。なお、これを受けたと思われる北村実「象徴天皇制とは何か『日本の科学者』一九九二年二月、二頁をも参照。ちなみに「六〇〇万という数字の根拠を渡辺・北村氏とも示していないが、私の調べた限りでは、八八年一月一日付『朝日』『読売』記事中に、宮内庁長官が天皇に「全国のお見舞い帳数が六〇〇万を超えた」と報告した旨の報道のみで、公式発表はみあたらない）。会場でも議論されたのは、この「ギャップ」天皇制強化策動の隘路と矛盾」として岡氏がレジメであげた、「①企業と国家の矛盾とギャップ（教育における国家・天皇、企業への忠誠と国家への忠誠）、②従来の保守支配との矛盾（経済主義、自衛隊の合意の内実）、③〈国家〉と〈天皇〉のギャップ（靖國における〈国家〉と〈天皇〉、天皇と皇太子、軍体験の欠如）」総じて「保守的統合の成功と反動的統

スワジランド（七一万、擬似立憲君主制）、ヨーロッパでは、イギリス（五六八九方、立憲君主制）、ノルウェー（四一九九方、立憲君主制）、スウェーデン（八四〇万、立憲君主制）、デンマーク（五二三方、立憲君主制）、オランダ（二四六六方、立憲君主制）、ベルギー（九二二方、立憲君主制）、ルクセンブルク（三六万、立憲君主制）、モナコ（三万、立憲君主制）、リヒテンシュタイン（三万、立憲君主制）、バチカン市国（一〇〇〇人、法王庁）、スペイン（三八三方、復古立憲君主制）、オセアニアに西サモア（二六方、立憲君主制）とトンガ（二万、立憲君主制）、以上計二九か國、ほぼ四億人である。政治体制の数にして約六分の一、五二億の人口の一分弱が君主制のものにある。

ただし、イギリス國王は、カナダ（二五六五方）、オーストラリア（二六二五方）、ニュージーランド（三二八方）などの元首をかねている（ここからイミタス『ワールド・アトラス』八九年版は、世界一七〇か國中共和制二五、君主制四五とする）。このイギリス連邦を考慮にいれても、日本は、現代世界最大の君主國であり、七四年にエチオピア皇帝、七九年在イランのシャイが倒れて後は、文字どおりの「ラス・エペラシ」の國である（日本國憲法第一章の英文は

合の困難のギャップ」についての、渡辺氏の所説であった（その詳細は、渡辺『日本國憲法「改正」史』日本評論社、一九八七年、『現代日本の支配構造分析』花伝社、一九八八年、など参照）。討論を聞いていた私には、特に戦争・占領体験をもつ世代の参加者には、必ずしも渡辺氏の問題提起が正確に受けとめられていないように思われた。私自身は、分析手法と時期区分において「帝國主義的社會關係の成熟」を説く渡辺氏とは意見を異にするが、「現代保守支配と天皇制のギャップ」にについては氏と基本的に同じ評価であり、会場から出た戦前型反動支配の復活の危機を説く意見には賛成しなかつた（私自身の戦後史分析の方法と時期区分については加藤『ジャパニカ時代の――現代日本の社會と國家』花伝社、一九八八年、『戦後意識の変貌』岩波ブックレット、一九八九年、参照）。

同時に、渡辺氏の「ギャップ・矛盾」の指摘においても、会場の討論全体を通じて、戦後天皇制を考えるうえでの肝心のポイントが一つ抜けていると思われた。それは、渡辺氏が挙げた矛盾①②③に追加して言えば、④「国内的統合装置としての天皇制と経済超大国日本の世界システムの位置とのギャップ」とでもいうべきものであった。渡辺氏自身は、報告後の前掲講演文で、アジア諸國との矛盾に言及してはいる

The Emperor)。その「象徴」としての地位は、米國占領担  
 当官が一九三一年のウエストミンスター憲章（クランクンはコ  
 モンウェルズ構成國の「自由な結合の象徴」から示唆を受  
 けたものとされ、七四年のスクエードン憲法（あらゆる公  
 權力は國民に由来）し「國王は國家元首」であるが「政府が  
 王國を統治する」や七八年のスベイン「議會君主制」憲法  
 （國王は國の統一および恒久性の象徴）にも影響を与えた。  
 そのため、日本國內の憲法學では、戦後日本を「共和制」と  
 する説が圧倒的であるが、國外では「立憲君主制」に分類す  
 るものが多数説である。そこで、良心的憲法學者も、日本は  
 共和制か君主制かと問われると、「立憲君主制と共和制の中  
 間形態ともいふべき独特なもの」と答えざるをえないのであ  
 る（小林直樹「象徴・君主・元首」『ジュリスト』九三三号、八九  
 年五月）。

### 三 世界システムの中での資本主義発展と君主制

一九世紀以降の近代國民國家の地球大での拡大過程では、  
 君主制の衰退は世界史の趨勢である。しかしそれは、必ずし  
 も資本主義発展や物質的生産力の拡大にともない自動的に共

衆の自由が当然とされることによつて君主制のもつ教権的機  
 能が弱体化したからである。

実はこのことは、理論的にいえば、資本主義発展が民主主  
 義発展をもたらし、民主化の中心は君主制打倒＝共和制樹立  
 にあるという古典的「民主主義革命」イデオロギの修正をも意  
 味した。近代世界システムの一貫した「中心」であつたイキ  
 リスや中欧・北欧では、ゆるやかな資本主義発展と君主制が  
 共存し、君主の實質的権限は剝奪されながらも、イデオロギ  
 「装置として生き残つた。逆に、二〇世紀、特に後半に植民  
 地・半植民地＝「周辺」から國民國家を獲得するアジア・ア  
 フリカの新興諸國のほとんどは、共和政体をとつた。

一九世紀から二〇世紀初頭に國民國家形成に入り、「周辺」  
 から「半周辺」「半周辺」から「中心」への上昇をはかつた  
 東欧、南欧などの場合は、ロシア・ドイツ・イタリアに典型  
 的のように、君主制が「上からの」資本主義発展の有効な一  
 手段とされ、君主をいだいて世界システムの既成秩序に反抗  
 して敗れる國が多く、二〇世紀後半には、ほとんど君主制を  
 存続できなかつた。この面でも、日本は、ユニークな例外を  
 なす。すなわち、「外部世界」から「周辺」にくみこまれる  
 明治維新期から、君主制の統合・動員による急速資本主義発

和制に移行したものでない。その衰退は、君主制と軍部が  
 結びついていいたため、おおむね対外戦争での敗戦と、その結  
 果としての君主制的イデオロギの統合の不可能による。それ  
 は、資本主義発展とは区別される民主主義発展、民衆の政治  
 的自律への歴史の闘争力に規定される。日本は、敗戦によつ  
 ても君主制が維持されたきわめて希有な例であり、第二次大  
 戦後のペルギと並ぶ例外をなす（佐藤功『君主制の研究』日  
 本評論新社、一九五七年、復原版『君主制の比較憲法学的研究』有  
 信堂、一九六九年、など参照）。

一九世紀までは極東であつた君主制が共和制かという統治  
 形態上の区別は、二〇世紀資本制國家論において、基軸的意  
 味をもたなくなつた。それは、君主制そのものが衰退し、君  
 主制國家の数が少なくなつたためばかりではない。國民主権  
 原理と大衆民主制が支配的になり、残された君主制も、王権  
 神授説による絶対君主制から憲法に根拠をもつ立憲君主制へ、  
 さらに議會君主制へと、権能が限定され、儀禮的・名目的・  
 形式的なものとなつてきたからである。また、國家の経済的  
 善後機能が大化し、君主制のもつていたイデオロギの正  
 統化の機能も選挙・議會制や学校教育・アスメリアにより  
 補完されたりとつてかわられたりし、國家と宗教の分離・信

展を極限までおしすすめ、「半周辺」から「中心」に挑戦し  
 て敗れても君主制が生き残り、君主をいだいたままで「中心・  
 中核」國家になりあがつたのである。「君主制資本主義」の  
 一つの典型が、ここにみられる。

「ある人が王であるのは、他の人々が彼に対して臣下とし  
 てあるまうからにすぎない。ところが彼らは、反対に、彼が  
 王だから自分たちは臣下なのだと考えている」とは、マルク  
 ス『資本論』第一卷の価値形態論に出てくる名言である（那  
 訳『マルクス・エンゲルス全集第三卷、七八頁）。この意味で  
 の君主制は、統治形態上での階級的・人民民主主義的な力関  
 係の制度的變遷であり、民衆の政治的自律と成熟のメカニ  
 ヲな尺度である。日本の天皇制も、日本資本主義発展のメカ  
 ニスムに効果的にくみこまれ、民衆が「臣民意識」をもつ  
 づける限りにおいて、天皇たりえているのである。

### 四 天皇制ニッポンと經濟大國ニッポンのキヤップ

しかし、君主制國家日本は、いまひとつ、世界によりよ  
 く知られた顔をもっている。この國は、いまや世界最大の貿  
 易異字國・債權國であり、設備投資大國・海外援助大國であ

る。一人当りGNPは二万三五千ドルとアメリカの一万人七六〇ドルとの差をますますひろげ（一九八八年、軍事費も米ノ両核超大国につぐ。アメリカ民衆は「ソ連の軍事的脅威」以上に「日本の経済的脅威」を感じとしており、「円がドルを支配する日」の到来が深刻に議論されている。D・パースタイン「FREN」草思社、一九八九年。世界の民衆が「黄金の国シベング」とあがれ、外国人労働者がつきぎに流入し、東京の港区・新宿区・豊島区などでは登録外国人だけで5%をこえヨーロッパなみになった。世界の側からみると、官僚的計画経済の成功と相対的な所得平等、それに権威主義的集団主義の強さから「日本は社会主義・共産主義国だ」とさえまじめに語られる。たとえ、その総土地資産が二五倍の面積をもつアメリカの四倍、つまり地価が一〇倍という「あぶく経済」的土地投機、サミット・G5体制により強制された「円高」統計魔術、庶民の生活実態は相変わらずの「東小屋の働き中毒」の所産であっても（加藤「日本が社会主義と映る時代」「聲牙」一〇号、一九八八年、同「日本人は金持ちか」「藤原彰編『日本近代史の虚像と実像』大月書店 一九八九年、参照）。この意味では、昭和天皇の葬儀に世界一六四か国（国連加盟国以上）二八国際機関の代表が出席し、時ならぬ「大喪

「ボク」とは焦点の合わない映像のように、一見矛盾する「ボク」と「冒険ニッポン」「世界八八年二月、三十七三頁）。このギョウジは、昨秋の段階では、イギリスの大衆新聞「ザ・サン」八八年九月二日付の記事をめぐる周知の事件として政治問題化した。「地獄は極悪天皇を待っている」とした例の事件である。日本国内では、天皇が「主権の元首」を意味する「サクリン」と表現された問題が主としてとりあげられた。しかし、海外の反応は、「天皇ニ元首」問題ではなかつた。かのマッカーサー三原則の「天皇は国の元首の地位にある」に遡るまでもなく、君主がいるのだからそれは当然元旨だろ」と受けとめられた。問題とされたのは、第一に、日本政府がイギリスの一大衆新聞の記事に公式に抗議し英国外務省にまで「遺憾の意」を伝えたこと（イギリス政府は「よく知られている通り、わが国には言論の自由があり、新聞は自らの見解を表明する権利がある」と回答した）、第二に、自民党渡辺政調会長が「日本国内にそれらの新聞の特派員がいるなら、国外退去を求めてはどうか」と発言したこと

### 五 世界の民衆からみた日本天皇制

サミット」の場になつたのは、今日の日本の世界システムにしめる客観的位置からすれば当然のことであつた。

ソウル・オリンピックで世界のジャーナリストがアジアに注目していた時期に発する日本の天皇の危篤と「自願アト」は、日の出の勢いのアジアの、そのまた頂点にある超大国日本に実は君主がいたことを、世界に改めて知らしめることになつた。しかもそれは、第二次世界大戦のヒトラー、ムッソリーニと並ぶ「軍国ニッポン」指導者と同一人物であつた。二〇世紀末世界の常識では、「経済大国ニッポン」と「天皇制ニッポン」の二つのイメージの落差は大きい。オーストラリア在住の日本人社会学者の証言を引こう。「二〇〇〇年は、英語圏に暮らす人びとの日本像は、ヒロヒト像とはかけ離れていた。自動車、電気製品、ハイテク商品などと共に連想される経済主義のイメージが圧倒的で揺るぎがない。オーストラリアについていえば、投機を自あてとした日本人の大規模な不動産投資が耳目を集めたばかりである。牛肉や農産物の市場自由化をめぐって、日本人は自らの利益の最大化を目ざす功利主義で手ごわい交渉者だといふ画像が国際的に定着してきている。そこへ『国民の象徴』の病状を案じて、日本中が行事やイベントの『自願』に専心しているというニュ

で、ただちに世界中に打感された。この事件を通じて「天皇の戦争責任」が国際的に注目され、「菊タヌ」の存在する「自願列島」日本の異様さが報道され、アジアの新聞や欧米高級紙もこぞって日本の天皇・天皇制問題を正面から扱いだしたのであつた（深瀬忠一「国際学会から見た象徴天皇制」ジュリスト」九三・九三三・九三三・九三三・九三三・九三三・九三三・外紙誌にみる天皇報道」1・2、凱風社、など参照）。

多くの日本人にとって、戦後も天皇の存在は「日常性」そのものであつたが、世界の民衆にとっては、世界史上例のないスピードでの経済発展を上げた国の頂点に前時代の遺物が鎮座しているのは、奇異な光景であつた。そこでこのギョウジを埋めて、なんとか一つのイメージに統一しようとする努力が、八八年秋から八九年春、海外でもなされた。しかし、その扱いは、今日の日本の世界システムの位置を象徴して、さまざまであつた。

かつての敵国で天皇制存続の決定者であつたアメリカの場、合、もはや昔日の面影はなく、ジャパン・ブネーなしではア

アメリカ経済そのものが身動きできなくなつたため、政府の対応やメディアの天皇制報道は、世界でもっともおだやかなものであつた。就任したばかりのブッシュ大統領が早くに「大喪」出席をきめたのも、日米同盟こそが現代世界支配の頂点構造であり、私のいう「ジャバメリカ」「ブレジンスキーの「アメリカン・ボム」や『日本経済新聞』や『エコノミスト』のいう「ジャバメリカ」が形成されている証左であつた。三大テレビネットワークが日本特集を組むなど日本への関心が強まり、不気味な「自衛ムード」には警戒し、「パール・ハーバ」の記憶」や「日本の経済侵略」と結びつける報道もあつたが、裕仁の戦争責任を追求する声は弱かつた。つまり、アメリカ・マスコミは、「経済大国ニッポン」から「天皇制ニッポン」を見て、後者を軽く扱つたのである。

日米に対抗して九二年日中市場統合をめざしているヨーロッパの場合には、『ザ・サン』紙に限らず、『ヒロヒトラ』である天皇の戦争責任を厳しく追求する世論が強く、経済大国化した日本を警戒する報道が多かつた。イギリス女王やオランダ王室の葬儀出席は見送られた。一月七・八日付フランス「ル・フィガロ」紙の論説は、「天皇制ニッポン」の方から「経済大国ニッポン」を理解しようとした極端な例である。

『文』は「ほんごんのフリップ」人には、とくに第二次世界大戦の記憶を抱えるフリップ人には、天皇裕仁の崩御を嘆く日本人に同情することは難しい。まさに彼の名において、日本軍は、三年半にわたるわが国の占領の間に、フリップの町や村を襲撃し、フリップの兵隊や市民を殺害し、いく百万ものフリップ人を殺り、辱めたのであつた」と「国民統合の象徴としてではなく、われわれ自身の隷属と権利剥奪の象徴として」の昭和天皇を回顧する。そして彼が、アメリカ国民に対しては公式に謝罪したのに、八六年一月のアキノ大統領訪日のさいの「日本人がフリップに迷惑をかけた」という発言をフリップ側が報道したのに対し日本政府が「会見内容は非公表が慣例」と否定し抗議した例をあげ、「なぜ対処の仕方がこれほどにも大きく違うのか。これは尊大な人種主義、日本の軍国主義と侵略性の隠れた特質ではないか。みずから『優秀民族』と考える日本人は対等と考える他の国民には頭を下げるが、劣等と考える国民には、そうしようとはしないだ」と告発する。同時に、次のようにもいう。「還族に悔やみを述べるのは、フリップの伝統の一つである。そのうえ、われわれは日本の財政援助と投資を必要としている。超経済大国になつた日本人は、フリップ

「一億二〇〇〇万人の日本人が自動車・テレビ・電子部品・半導体等の生産で世界一となり、世界の総工業生産の一・〇二%（一九五〇年には一%であつた）を占めるに至つた」と、また日本の貿易黒字額が九年間に五〇倍（一九七九年二〇億ドル、八七年一〇〇億ドル）になつたことはいわゆる『日本の奇跡』として知られている。――奇跡をもたらしたものは何であつたのか、恐らくそれは裕仁の祖父にあたる明治天皇がその昔掲げたスローガン『日本世界一』に発するものであろう。日本人は神国日本が世界一になるためなら如何なる犠牲にも耐えられる。彼らは世界全体をもとめせず、ただ日本のみを崇拜するのである。……この『日出づる国』においては全ての労働者、従業員、管理職に至るまでが毎朝の始業前に集まり、日本の国歌、すなわち天皇讃歌を歌うのである。これこそが日本の奇跡をもたらしたものである」『世界』八九年三月、一三七頁。

アジア・太平洋諸国の場合には、戦争責任追究は明確で、天皇を頂点にいたたく日本資本主義のアジア支配を危惧し警戒した。つまり「天皇制ニッポン」を直視した。しかし中には、日本の経済援助なしには立ちゆかない自国の現状をふまえた、屈折した論調も現れた。八九年一月一日付『アジア・タイムズ』

への最大の援助供与国になりつゝある。われわれには日本の円、日本の観光客、日本の投資家が必要であり、日本人の感情を損ねてはならない。だから己のプライドをぐと飲み込んで、彼らには偽善的に用意のべようではないか」と『世界政治』七八二頁、八一九頁。

現在社会主義諸国の天皇報道は、アジアやヨーロッパに比して、アメリカなみにおどろかした。ソ連も中国も、世界的な天皇制論議を傍観した。長谷川慶太郎は、「連債券への投資家は圧倒的に日本の銀行」なのにコルパチョフは天皇葬儀に出席せず「日本のもつ経済力を活用する機会」を逸したと批判的に論じたが（『ボリス』八九年四月）、出席したルキヤノフ最高幹部会第一副議長らは、非公式に新天皇の訪ソを要請したという。

六 世界システム論のなかの時間的・空間的仕切りとしての天皇制

こうしたギョツプが生まれてくる根拠は、現代天皇制の出発点から存在していた。そもそも天皇制にかかわる觀念の大部分は、明治維新をはさむ近代化過程においてあらたにつくりだされた「發明された伝統」であり、世界システムのなか

戦後の象徴天皇制は、第一に、二次の世界戦争による世界システム内インタナショナルシステム再編の所産であった。ヘゲモニー国家の地位を確立したアメリカは、「周辺」転落の危機にあった敗戦国日本を、自己の覇権下の「中心」末端にくみこみ間接占領・資本主義育成策をとった。戦前の神権的天皇制は、日本国民の抵抗闘争・民主革命によってはななく、外庄によってはじめ、象徴天皇制に転化された。戦後歴史学ではしばしば、アメリカ占領軍の反共的思惑により、すなわち日本の社会主義化に「脱システム化」を恐れて天皇

### 七 インタナショナルシステムのなかの象徴天皇制

「皇民」と再統合するために、「国体」概念を用いた。その打倒をめざすコミンテルン日本支部「日本共産党」、コミンテルン・チゼの「モナキー」の訳語として対置したのが「天皇制」であり、広く使われるようになったのは戦後のことである（加藤「三十二年十月の周辺」『思想』六四三・六四四号、一九八二年三・四月、など参照）。

での日本の国民国家形成過程の産物である（安丸良夫「近代天皇儀の形成」『歴史評論』四六五号、八九年一月、I・ウォーラーステインらの世界システム論では、国家は、インタナショナルシステムに国家間関係において初発から規定される（Wallerstejn, *The Politics of the World-Economy, Cambridge* 1984）。「天皇」という呼称自体は、未だ「資本主義世界のシステムに世界経済」生誕以前の「世界帝国」の時代に、古代中国から輸入されたものであった。江戸時代初期に來日したイギリス人は、徳川將軍を「皇帝」、天皇を「日本の法王」とよび、元禄期のケンペルは、將軍を「現世の皇帝」、天皇を「宗教上の皇帝」と使い分けた。ヨーロッパ中心の資本主義「世界経済」が東アジアを「外部世界」から「周辺」と最終的に組み込んでいった一九世紀中葉、開国を迫る欧米列強は、徳川將軍を「大君」、京都の天皇を「御門」とよんでいた。列強の関心が主として中国にある時期に、好運にも「王政復古」による国民国家建設にとりかかりえた明治維新政府は、当初「天皇」名を外交関係にも使おうとした。しかし、列強から「貴国に専内卑外ノ弊甚敷」として拒否され、外国向けの「万国公法」の世界では、おおむね「皇帝」名を用いた。

日清・日露戦争勝利でアジアにおける早業的資本主義化の軌道を確認し、第一次世界大戦の漁夫の利で「平周辺」になりあがった日本は、軍国主義的「中心化」の方向にふみだす。一九三三年の日蘭条約ではまだ「日本国皇帝」と署名していたが、四〇年の日タイ条約では「大日本国天皇」となり、かの「大東亜戦争」宣戦詔書も「天皇」名で発布され、その支配空間は、朝鮮・中国から東南アジアにまで広がった（林基「近世に於ける天皇の政治的地位」『思潮』一九四六年五月、高島通敏「天皇」という語の翻訳『法學セミナー増刊 天皇制の現在』日本評論社、一九八六年、杉本史子「天皇」号をめぐって『歴史評論』四五七号、八八年五月、など参照）。

つまり、「天皇」の概念は、日本の民衆を世界から時間的・空間的に隔離する仕切りであり、日本資本主義は、その「資本主義的時間と空間の民族的囲い込み」（N・グリーンズ「國家、權力、社会主義」エニテ、一九八四年）に資本主義世界システムへの参入・上昇過程においてそれを最大限に利用してきたが、その仕切られた時間と空間は、一方で当時の列強との力関係に制約され、他方で軍国主義的・帝國主義的に拡張されたのである。

逆に「天皇制」と言う体制概念は、戦前は市民権を持たな

脚が温存された、と評価される。確かに戦後のアメリカが「一國社会主義」ソ連の権益圏拡大を恐れ、アソシシャル援助など冷戦を背景に資本主義世界システム再建をはかったのは事実である。しかし、日本に関していえば、「社会主義化」の危険は差し迫ったものではなく、「非軍事化」「民主化」の「環として天皇制の転換が進められた。

最近の憲法史・占領政策史の研究によると、占領政策の立案過程では「天皇制の立憲君主制への改編は既にGHQ民政局の草案作成の前に対日戦後政策形成のなかで、天皇制廃止と共に戦後とされる政策選択肢の一つとして準備されていた」この選択肢設定は、日本で起こりうる民衆の天皇制廃止運動への敵対からではなく、この運動が起こらないと判断され、また起こったとしても、天皇制廃止を通して自由主義的な統治を実現する能力をもちえないと判断されていたことからなされ「そのため現実にとられた改編は立憲君主制という形態も極度に天皇の権限や役割の縮減された象徴制という形態をとらざるをえなかった」（三輪隆「アメリカ國務省における戦後天皇制構想」『歴史学研究』五九一号、八九年三月、一頁、五百）

旗頭真「米国の日本占領政策」中央公論社、一九八五年、参照。

このことは、日本の民衆の弱さの表現でもあり、「民衆の



戦争責任」として提起される。「敗戦からわずか半月後の帝國議会で強調されたのは、国力を結集し、平和日本建設の道に邁進せよ、とする戦後日本の総路線です。……『平和日本の建設』という当面の課題の前には、戦争責任がだれにあつたのか、などという後向き課題に取り組み余地はないとされたのでした。ここにあらのは……「前向き課題への流れ込み」でした。当時の為政者たちが『國体護持』をスローガンにしていた、とよく指摘されていますが、事実、そのとおりなのですが、『國体護持』は天皇制擁護が至上目的でスローガンになつていただけではなく、天皇制すら、敗戦日本の再建路線に不可欠の構造的要因として計算され、組み込まれていたのではなかつたかと思われま。まさに『玉の操作』の論理がこでも作動していたのです(高橋彦博『民衆の側の戦争責任』青木書店、一九八九年、三頁)。

第二に、こうして生きながらえた戦後天皇制は、大日本帝國憲法下の「神聖にして侵すべからず」の元首にして統治権を総攬する地位から、日本國憲法の定める「主権の存する日本國民の総意に基く」「日本國の象徴であり日本國民統合の象徴」に転化され、「内閣の助言と承認」にもとづく「國事行為」のみをおこなうとされた。その一〇項目の國事

か、「天皇の神權マツゼージ」(四六年九月)でアメリカに対する神權を始め琉球の他の諸島を軍事占領し続けることを希望している」と述べたといわれる天皇が、七二年五月の國遊会で、屋良沖繩県知事に「沖繩県が日本に復帰して喜ばしく思いますが、やむをえないことと私は思っています」と語つたのは、七五年一月訪米時のホフバハス晚宴会で「私が深く悲しみとするあの不幸な戦争の直後、貴國がわが國の再建のために、暖かい好意と援助をさしやられたことに対し、貴國民に直接感謝の言葉を述べて下さいます」と公式に述べて帰國した直後であつた。それは天皇の初めての公式記者会見であり、この「不幸な戦争」とは「戦争責任を認めない」とか、という質問に、「そういう言葉のあやにについては私は文字方

行為(第七条)のなかには、「批准書及び法律の定めるその他の外交文書を認定すること」「外國の大使及び公使を接受すること」が含まれており、これら各項目は貴族院での制憲議論で一時制憲が問題とされたが、そのまま制定された。この対外的「象徴」としての役割が、吉田内閣以来対外関係において天皇を「元首」扱いするさいの最大の論拠となり、七五年の裕仁訪米は「元首会談」といわれ、「皇室外交」を通して諸外國もそれを当然と受容するしやすくなつた。天皇代替りをきつかけに、この「外交関係で確立した慣行がそのまま國內に持ち込まれようとしている」(長谷川正安「明治憲法と昭和憲法」『法律時報』八九年五月)。「天皇の元首化」は、世界システム内ではなかつた既存事実とされてきた。もつとも、反動派が勢力はそれを法的にも明文化しようとするのだが、自衛隊の場合と同様、それを強行すると「平和的経済大國」というキャッチフレーズのキツプアが大きくなり、対外的には摩擦を強めざるをえなくなるという矛盾をはらんでいる。

第三に、こうして大日本帝國憲法にもつき即し、日本國憲法により「象徴」と転態された昭和天皇の「政治的発言」とりわけ戦争責任にかかわる発言の多くは、日本國民に対して発せられたものではなく、外國の指導者や記別的に、見えかくれしてきたのである。

### 八 おわりに

こちらからご確認ください。

[https://www.tsukijiichiba.com/info/landing\\_pages/subscribe\\_newsletter.html](https://www.tsukijiichiba.com/info/landing_pages/subscribe_newsletter.html)

天皇制に対する批判の主体はいかに形成されるかという問いをたてたばあい、問題の中心を占めるのは、おそらく、天皇制に否定的あるいは無関心であったような若い世代の少なからずがやがては天皇制擁護ないし容認の立場に変わっていくのはなぜか、ということであろう。これまで、世代の若返りによる天皇制の地盤沈下がくりかえし期待されてきたが、戦前天皇制の経験をもたない世代が六〇%を占めるに至った

はじめに

現在においても、そうした予想は必ずしも実現していない。つまり、渡辺治氏がいうように、「世代交替が自動的に社会の意識をかえ、天皇・天皇制についての合理的意識を浸透させるだろう」という見方が間違っている。世代交替に天皇制支持基盤の自然的衰弱を期待することはできないのである。なぜか。「時々の民衆の支配的意識は決して年齢差によって色分けされるようなものではなく、常に時の支配構造とイデオロギ―に組み込まれた形のみ存在し、したがって、時と共に自然に変化する」というものではありえない」（現代政治的構造の中 天皇制、『歴史学研究』一九八九年四月号、一九頁）

吉崎祥司

# 天皇制批判の主体形成と民主主義

『天皇制批判の現在を問う』

いものであり、我々個人が自由な人間であるという外観と幻想の基底で、どんなに深く民族国家日本に帰属しているかを照らしたす鏡であり屈辱の記念碑である（前掲論文、二〇頁。「ジャバメリカ時代」の日本の多国籍資本は、国内の危機管理と「平和的経済大國」のイメージ維持のため象徴天皇制を残しながらも、他方で天皇制的仕切りをこえた活動で貿易摩擦や文化摩擦を強め、国内にはアジア労働者が流入してきて、天皇制的統合とのギャップをうみだしている。しかし、日本の民衆意識の方は、「経済大國ナショナルリズム」を強化して「権威主義の心性」を再生産し続け、「屈辱の記念碑」たる天皇制を下支えしているかにみえる。これらの点は別稿で詳述するが（現代日本資本主義と象徴天皇制『季刊窓』創刊号、一九八九年）、天皇制の時間・空間の呪縛からいかに脱却し、民衆の生活世界をグローバルな人類的時間・空間にどのようにつないでゆくかが本格的に問われる時代に、いま、私たちは、生きていくのである。

（かとう てつろう 一橋大学・政治学）

## 「新しい思考」と史的唯物論

岩崎允胤

いま、世界中に波紋を広げるゴルバチョフ書記長の「新しい政治思考」について、その問題点を哲学者の立場から分析、説明する反論の書。

目次より

- 第1章 「統一的世界の法別性」と史的唯物論
- 第2章 ゴルバチョフ書記長の「新しい思考」と史的唯物論
- 第3章 宗教者の反核・平和運動と「新しい思考」とは何か
- 第4章 新しい「平和哲学」とは何か

定価2369円

白石書店

東京都千代田区神田神保町1-28

電話03(291)7601  
張替東京2-16824